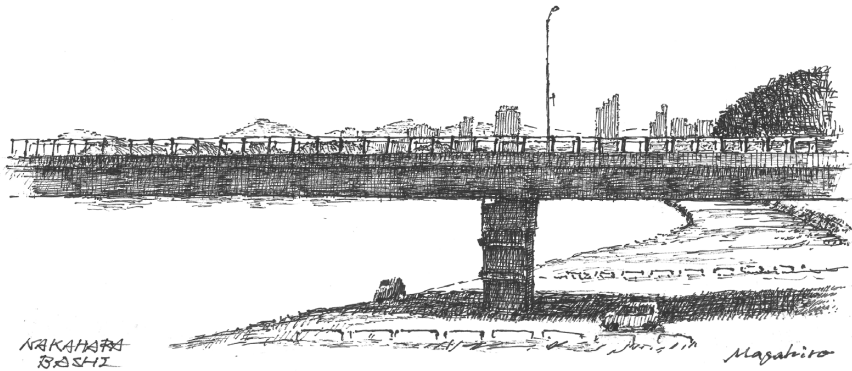


「教職」の醍醐味

県中学校長会会長
(岡山市立西大寺中学校長)

梶原 敏



教職の道を歩むつもりなどなかった。県外の大学の外国語学部に入學したもの、恥ずかしながら英語の学びから遠ざかり、山登り(部活動)に夢中の大学生活だったが、幸いにも四年生の九月に、旅行者への就職が内定していた。ちょうどその頃、母校の中学校で教育実習があり、それを機に教職への憧れが強くなり、英語教師を目指すことにした。そうして一年後、地元岡山の中学校の教壇に立つことができた。

ところが、当時は全国的に校内暴力で中学校が荒れ狂っていた頃で、初任校も例外なく大変だった。母校との余りにも大きな環境の違いにカルチャーショックを受けた。生徒は教師の指導に従い、授業は教室で受けるものと思っていたが、現実には全く別世界。勤務した七年間で、一通りの事件が起こり、学校の様相を呈していなかった。

生徒の許せない言動に血が上り毎日のように生徒と争う空しさに耐えきれなくなり、退職願を出したが、校長は笑って相手にもしてくれなかった。

一方で、学級のトラブルメーカーだったF男宅への家庭訪問が日課となっていたのだが、玄関先で、「ごりや、何し来たんだが」とF男から物を投げつけられ罵声を浴びる毎

日。心を通い合わせることでできない空しさと悔しさから、教職への進路変更をずっと悔い続けた。

ところが、二年程経った頃、F男の口から信じられない言葉が飛び出した。「梶さん、いつもありがとう。」その時ほど「ありがとう」が心に深く染み入ったことは今までにない。後に、F男は誰にも言えない家庭内の非情な過去を背負い、大人など信用できない環境の中で耐え続けながら生きてきたことを知った。世の中の道理や正しい言葉遣いなど身に付くはずもない。F男は卒業後、ある事件に巻き込まれこの世を去ってしまった。

現在も、子どもたちが自身の責任ではないところで、苦しんでいる姿を目にすると、F男の姿と重なり、心が締め付けられ、何もできない無力感に駆られることがたびたびある。そうした中、教職員は目に見える子どもたちの表情や言動から、目に見えない心の中の息遣いを感じ取り、どんな子にも粘り強くかわり、支え続けてくれている。そうしたチームとしてどんな子も見捨てない協働作業が教職の醍醐味であり、使命だと思っている。子どもから学ぶことは実に多い。貴い職に就けたことに心から感謝している。